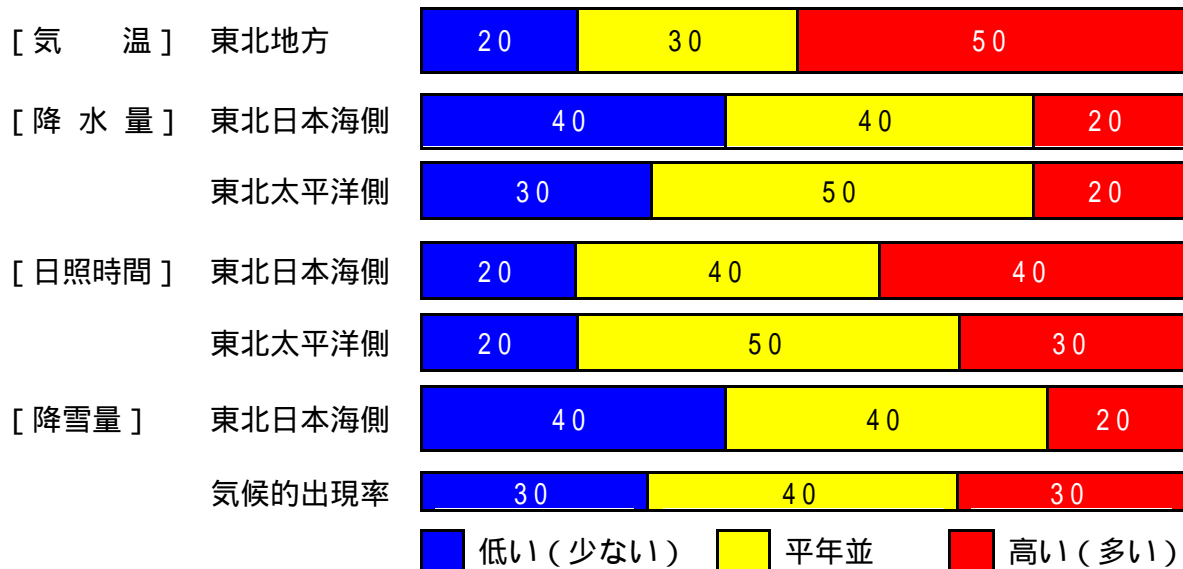


## 東北地方 1 か月予報の解説（予報期間：12 月 16 日～1 月 15 日）

平成 12 年 12 月 15 日 仙台湾気象台

### 1．向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）



[ 気 温 ]: 東北地方は「高い」の可能性が最も大きく、その確率は 50％です。次に大きい可能性は「平年並」で、その確率は 30％です。「低い」の可能性は 20％と小さい。

[ 降 水 量 ]: 東北日本海側は「平年並」か「少ない」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ 40％です。「多い」の確率は 20％と小さい。

東北太平洋側は「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は 50％です。次に大きい可能性は「少ない」で、その確率は 30％です。「多い」の可能性は 20％と小さい。

[ 日照時間 ]: 東北日本海側は「平年並」か「多い」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ 40％です。「少ない」の可能性は 20％と小さい。

東北太平洋側は「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は 50％です。次に大きい可能性は「多い」で、その確率は 30％です。「少ない」の可能性は 20％と小さい。

[ 降 雪 量 ]: 東北日本海側は「平年並」か「少ない」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ 40％です。「多い」の確率は 20％と小さい。

### 2．予想される天候の特徴（もっとも高い確率の予報が実現した場合の天候は以下の通りです。）

向こう 1 か月

冬型の気圧配置は長続きしないでしょう。東北日本海側は平年に比べ曇りや雪または雨の日が少なく、東北太平洋側は平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

平均気温は高いでしょう。

平年の晴れ日数：東北日本海側約 6 日、東北太平洋側約 18 日

各予報期間の天候の特徴

1 週目……………

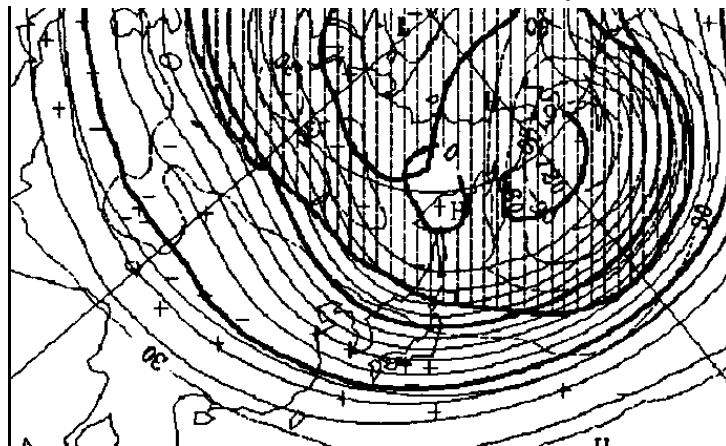
気圧の谷が周期的に通る、気圧の谷の通過後は冬型の気圧配置となるでしょう。東北日本海側では雪か雨の日が多いでしょう。東北太平洋側では、期間の中頃天気の良いところがありますが、その他の日は沿岸部を中心に概ね晴れる見込みです。

平均気温は平年並の見込みです。

平年の晴れ日数：東北日本海側約 1 日、東北太平洋側約 5 日

- 2 週目…………… 冬型の気圧配置は長続きしないでしょう。平年と同様に東北日本海側では曇りや雪または雨の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多いでしょう。  
平均気温は平年並の見込みです。  
平年の晴れ日数：東北日本海側約 2 日、東北太平洋側約 4 日
- 3～4 週目…………… 冬型の気圧配置は長続きせず、気圧の谷が周期的に通過するでしょう。東北日本海側では平年に比べ曇りや雪または雨の日が少なく、東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。  
平均気温は高い見込みです。  
平年の晴れ日数：東北日本海側約 3 日、東北太平洋側約 9 日

予想される天候に関する循環場の特徴（アンサンブル平均天気図）

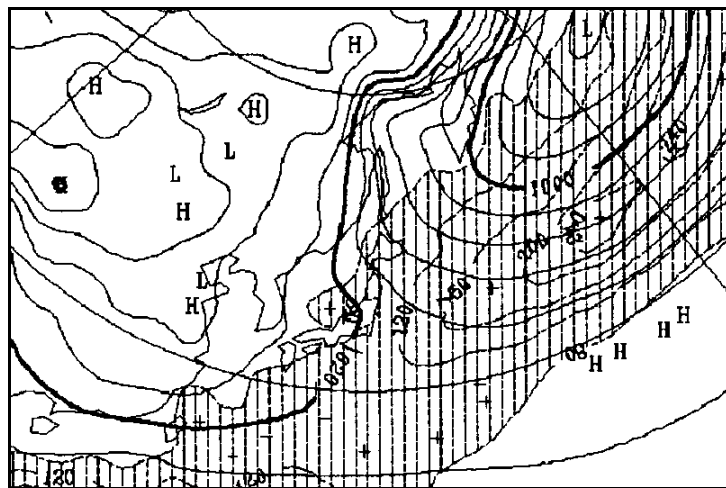


月平均の 500hPa 高度・偏差  
（等高線：60m 毎、偏差：30m 毎、陰影部：負偏差）

・ 500hPa 高度・偏差

月平均で見ると、極付近は負偏差。日本付近は北海道までこの負偏差に覆われるが、東北以南は広く正偏差域が広がる。日本付近の偏西風は東西流が卓越しており、周期変化が基調だが、時々寒気の影響を受ける見込み。

週別（図略）では、1 週目は東北北部まで負偏差に覆われ寒気が南下し易い。2 週目以降は、北海道まで正偏差域が広がり、寒気が南下しにくい。

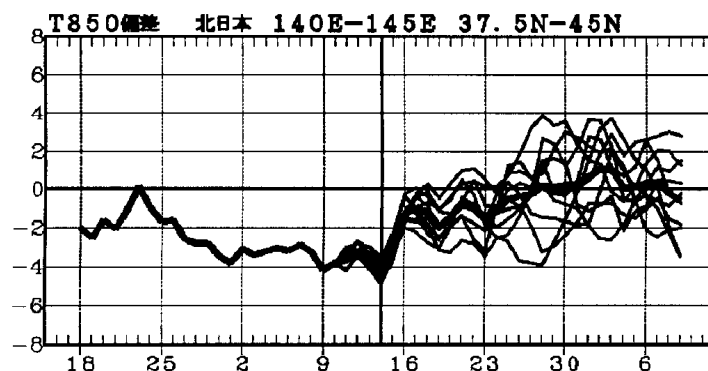


月平均の地上気圧と降水量  
（等圧線：4hPa 毎、降水量：40mm 毎、陰影部：80mm 以上）

・ 地上気圧と降水量

月平均で見ると、中国大陸に高気圧があり、西日本に張り出す。一方、ベーリング海では低気圧が発達して、東北地方は冬型の気圧配置となっている。まとまった降水域は日本の東海上だが、日本海にも冬型に伴う降水域が予想される。

週別（図略）では、北日本の冬型の気圧配置は 1 週目が最も強く、低気圧の通過後強い寒気が南下しやすい。2 週目以降は冬型の気圧配置は弱く、寒気は南下しにくい。



北日本 850hPa の気温平年差の実況と予想

（縦軸：気温平年差（℃） 横軸：日付）

発表日以降の太線は各アンサンブルメンバー（細線）の平均値

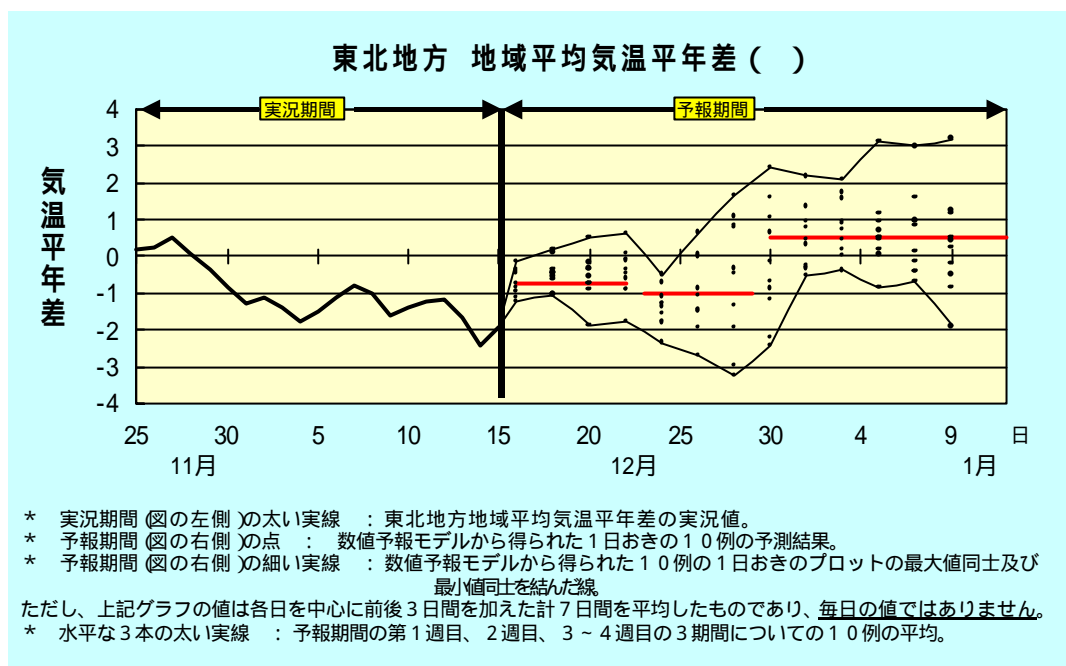
・ 北日本 850hPa 気温平年差の時系列

アンサンブルメンバーの平均は、1 週目は平年より低いですが、2 週目以降はほぼ平年並で推移する。ただし、2 週目からはばらつきがやや大きくなる。

なお、最近では 850hPa の気温よりも地上気温が 1～2 程高めになる傾向が続いている。（次ページ東北地方地域平均気温平年差図参照）

### 3．東北地方地域平均気温平年差の実況と予測結果

週別の気温は、1 週目「低い」、2 週目「低い」、3～4 週目「平年並～高め」を予測している。1 週目は週間予報資料を考慮し「平年並」とする。また、2 週目以降は北日本 850hPa 気温平年差の時系列を参考に予測を高い方に修正して、2 週目は「平年並」、3～4 週目は「高い」とする。アンサンブルメンバー間のばらつきは 2 週目にやや大きくなるが、多くのメンバーは後半高温傾向を示唆しており、信頼度は大きい。

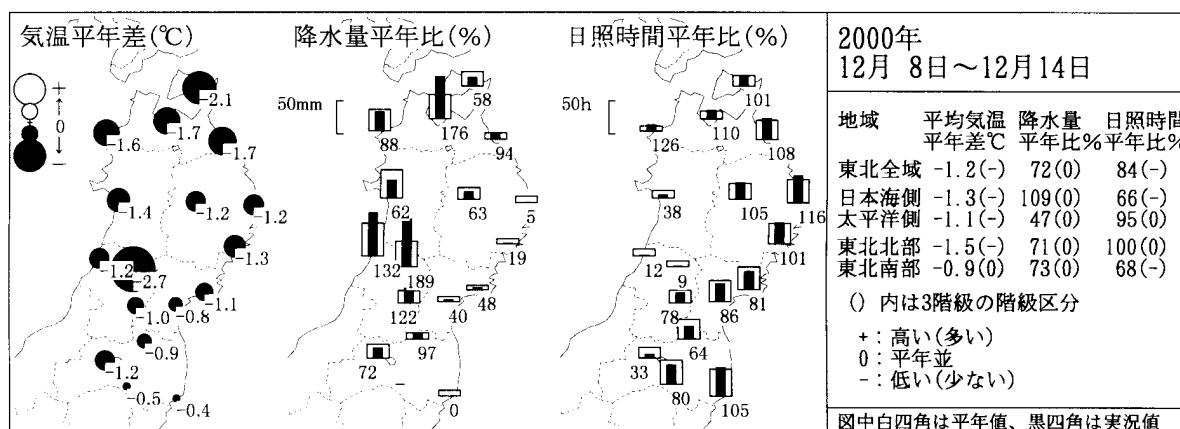


### 4．最近 1 週間 (12 月 8 日～12 月 14 日) の天候の経過

この期間、前線や気圧の谷が周期的に通過し、11～13 日は冬型の気圧配置が続いた。このため、東北日本海側は曇りや雪または雨の日が続き、東北太平洋側では天気は周期的に変化した。

11～12 日は冬型の気圧配置が強まり強い寒気が南下したため、東北太平洋側でも雪となり、東北各地で大雪や暴風となった。特に 12 日は東北自動車道などでふぶきにより衝突事故が多発した。

平均気温は、東北北部で平年差-1.5 と平年より低く、東北南部で-0.9 と平年並だった。降水量は、東北日本海側で 109%、東北太平洋側で 47% でともに平年並だった。日照時間は、東北日本海側で 66% と平年より少なく、東北太平洋側で 95% と平年並だった。



最近 1 週間の平均気温、降水量及び日照時間の平年差 ( 比 )

お 知 ら せ  
平成 12 年 12 月 15 日  
仙 台 管 区 気 象 台

## 季節予報で用いる気候統計値の変更について

気象庁では、世界気象機関（WMO）の技術規則にもとづき、西暦年の 1 位が 1 の年から連続する 30 年間のデータを用いて気温、降水量など気象要素の気候統計値を求めています。現在は 1961～1990 年の 30 年間のデータから作成した気候統計値を用いていますが、2001 年から 2010 年までの 10 年間は 1971～2000 年の 30 年間のデータから作成した気候統計値を用います。2001 年からの気候統計値の切り替えに合わせて、季節予報で用いる平年値、階級区分値等を変更します。

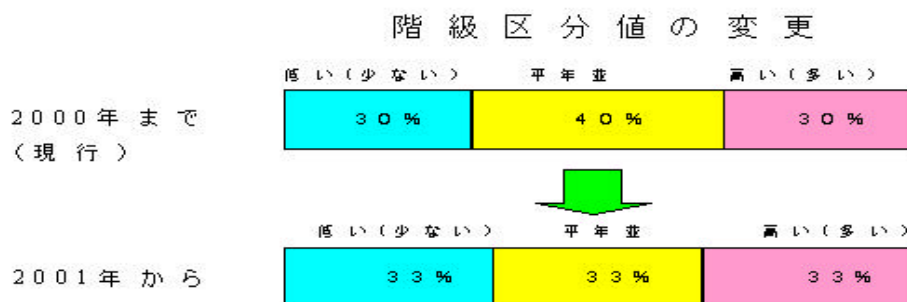
### 1．実施時期

- 1 か月予報：2001 年 1 月 5 日（金）の予報から
- 3 か月予報：2000 年 12 月 20 日（水）の予報から
- 暖候期予報：2001 年 3 月 12 日（月）の予報から
- 寒候期予報：2001 年 10 月 10 日（水）の予報から

### 2．階級区分の変更

季節予報においては、「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」という 3 つの階級を用いて、気温や降水量等の平年からの偏りの程度を表現しています。これまでは、1961～90 年における各階級の出現率がそれぞれ[ 30%、40%、30% ]になるように定めていましたが、2001 年からは、1971～2000 年の 30 年間のデータを用いて各階級の出現率が全て同じ [ 33%、33%、33% ] になるように階級区分値を変更します。各階級の気候的な出現率を同じにすることで、季節予報で用いている確率がこれまでより理解しやすくなると考えています。

階級区分値を等出現率に変更することに伴い、季節予報文における気候的出現率の図を削除



します（東北地方 3 か月予報文の例を別紙に示します）。

## 東北地方 3 か月予報文の変更例

### これまでの予報文（例）

東北地方 3 か月予報 ( X 月から X 月までの天候見通し )			平成 X 年 X 月 X 日 仙台管区气象台発表
< 3 か月 ( X ~ X 月 ) の気温の各階級の確率 ( % ) >			
[ 気温 ]			
東北地方	1 0	4 0	5 0
気候的出現率	3 0	4 0	3 0
	低い	平年並	高い
3 か月平均気温は高い可能性が最も大きく、その確率は 5 0 % です。			
( 以下、省略 )			



### これからの予報文（例）

東北地方 3 か月予報 ( X 月から X 月までの天候見通し )			平成 X 年 X 月 X 日 仙台管区气象台発表
< 3 か月 ( X ~ X 月 ) の気温の各階級の確率 ( % ) >			
[ 気温 ]			
東北地方	1 0	4 0	5 0
	低い	平年並	高い
3 か月平均気温は高い可能性が最も大きく、その確率は 5 0 % です。			
( 以下、省略 )			